

高校入試までに偏差値を5アップさせる方法

開倫塾

塾長 林明夫

試験までに偏差値を5アップさせる方法などあろうはずがない、と考える人は多いと思います。しかし、次の方法で勉強をすれば必ず偏差値は5アップします。是非お試し下さい。

※但し、以下述べることは、偏差値 68 以上の人の場合には余りあてはまりません。もうほとんど、その上がないからです。しかし、勉強をする上で参考にはなると信じます。

1. 各科目ごと偏差値を5ずつアップさせることを考えること。

逆に言うと全体を一気に5アップさせることを考えないことが大事です。ここまで言えば、私が何が言いたいのか、どのように偏差値を5アップさせたらよいかわかってしまった人も多いと思います。そうです。科目ごとに、どうしたら偏差値が5アップするかを対策をたてるのが最も大事なのです。

2. 各科目ごとに、自分の弱点を捜し出すこと。

何故弱点を捜し出すかと言えば、弱点克服の対策を立てるためです。ではどのようにして弱点を捜し出すか。これもいたって簡単です。中学3年生になって、自分の受験したすべての模擬試験を一度集めて下さい。もちろん「開倫塾模試」も含まれます。問題と解答用紙と配布された解答・解説もいっしょにです。手元に保存していない人は先生や友人にたのんでコピーさせていただくこと。受験学年以外でこの文章を読んでいる人は是非このことを覚えていて下さいね。すべての試験問題は試験終了後完全な形にして保存すること。その試験が終わったあと何回でも使い道があるのですから。どんなにできの悪かった模試も宝の山ぐらいに思って下さい。

各科目ごとに中学3年生になって受験したすべての模擬試験の「問題」と、「自分の解答」「模試解答と解説」が手元にそろったら何をするか。各科目ごとにノートを用意して下さい。そのノートに、まちがえた問題を一つ一つすべて書き写し、正解と解説もていねいに書き写して下さい。感のさえている人はこれだけで偏差値が5アップしてしまいます。国語や社会・理科も写すのです。「問題」、「正解」、「解説」をていねいに写しているだけで「スー」と偏差値が5アップする人さえいます。そのくらいこの「書き写し」は効果があります。

ここまで書けば、そのあと何をやるかなど簡単にわかると思います。一つ一つの問題についてよく理解できなかつたら「教科書」「参考書」にあたり、「友人」や「先生」にたずね、「似たような問題を問題集でやってみる」ことだけです。偏差値が70に近い人は、遠慮せず、高校生用の参考書をどんどんやって下さい。70以上にするにはそれ以外道はないと思って下さい。

3. 勉強の絶対時間を確保すること。

TV・ファミコン・マンガ、長電話、長風呂、家族とのいさかい、受験や友人関係で悩むこと……等で時間を使っている場合にはありません。全精力、全体力を勉強に傾けること。勉強以外のことは一切断る気構えが、偏差値5アップには必要です。こうは言っても「他人に迷惑をかける」ことは断じてなりません。一度勉強をすると決意したら何者にも束縛されることなく一心不乱に机に向かえ、と言いたいのです。

「気構え」が何より必要です。

4. たえず自分は合格をするのだと念ずること。

自分が希望する高校の学生になったときのことをたえず想像し思い描いて下さい。心が楽しくなり、元気が出ます。「落ちたらどうしよう」とは考えないこと。消極的なことを考えると「元気」が出なくなります。勉強には「元気」が必要です。その「元気」を出す「もと」は、「こうなりたい」という本当に明るい、朗らかな、生き生きとした、勇ましい夢、想像の絵です。これは、すべてに通じます。

If you can dream, you can do it ! です。

5. 今やっている勉強の本当の意味も知ること。

以上書いた通りやれば、誰だって偏差値は各科目ごとに5アップします。この文を読んだ人は、今すぐやって下さい。ただ、みんなが今やっている勉強は、非常に尊い、貴重なものであることを次に引用するやや長い文章から是非読みとって下さい。

本書の読者は、読解力という驚くべき技を持っている。おしなべて我々の祖先が文盲だった事実には思っていたら、時おり異様な感じに襲われざるを得ない。頭が悪いとか、無知だったとかではなく、文盲であるのは当時、致し方なかったのだ。

読めるということだけで、昔は舌を巻くような才能だった。聖アウグスチヌスが15世紀に書き残した中に、師であったミラノの司教、聖アンプロシウスに触れ、師は勉学に励んだので唇を動かさずに文書を読むことができた、とのくだりがある。この驚くべき才能の故に、聖アンプロシウスは世界で最も頭の切れる人に祭り上げられたのである。

我々の祖先の大部分は文盲ただけでなく、簡単な足し算引き算の計算能力さえなかった。できる少数の人間は、かえって危険な存在と見なされた。アウグスチヌスが出したとされる信じ難い警告は、キリスト教徒は足し算や引き算ができる人物に近づくべきでない、というものだった。そんな連中は「悪魔と契約を結び、精神を惑わせ、人を地獄の束縛に閉じ込める」ことが明白だった。現代なら小学4年生で算数を習っている生徒の多くがいただく感情だろう。

商業を志す学生に収支決算をマスターした教師が教え出すのは、それから千年経ったのちのことである。

ここで強調したいのは今日、ビジネスの世界で当たり前と思われている簡単な技術の多くが、長い時間をかけた文化的発展の積み重ねであり、何世紀もの産物であるということだ。世界中のビジネスマンがいま依存している知識は、それと自覚してはいないが、中国から、インドから、アラブから、フェニキアの貿易商人から、そしてまた西欧からの遺産の一部なのである。こうした技術を身に着けた何世代もの人間が、その技術を改善し、後代に伝え、そしてゆっくりと現在

の形に作り上げてきた。

経済のすべてのシステムは、知識の基盤の上に立っている。ビジネス関係のすべての企業も、社会的に積み上げられて来たこの前世紀からの遺産に頼っている。しかし、重要であるべきこの要素は資本、労働、土地と違って、物の生産に必要な要素を勘定する際、普通は経済学者と経営幹部になおざりにされてきた。とはいえ今日、この要素は、一時に代価が支払われ、時に只で搾取されるが一全要素中、最も重要なものとなった。

歴史上に数は少ないが、知識の進歩が時代遅れの障害をいくつか打ち壊してきている。そうした突破口のうち特記されるべきは、新たな思考方法の到来と、表意文字・アルファベット・零といった情報伝達手段の発明である。そして我々の世紀において、それはコンピュータにほかならない。

30 年前にコンピュータを少しでも操れる者は、大衆紙で数学の魔法使い、あるいは巨大頭脳扱いされた。唇を動かして文字を読む時代の聖アンプロシウスと全く同じである。

今日の我々は、人類の全知識構造が再び変革に身を震わせ、同時に古い障害が崩れつつある、歴史上、何回とない稀有の時代に生きているのだ。

出典「パワー・シフト」(上) P137 - 138

アルビン・トフラー著

1990 年 11 月 20 日 フジテレビ出版刊